

軍法富士見西行

江口の里の段（江口揚屋の段）

奥へ忍び行く。

早や盃も引き汐に、今ぞ情けの知死期時、

仲居「お寝間、お寝間」

と寝道具を、運ぶ仲居のお浜が機転、

仲居「大座敷は塞がる、小座敷は狭し。いつそこそこ」

と敷く布団、屏風引く間を待ち兼ねて、

出てくる客は背虫大尽、写絵が手をこゝ大事と、引き

連れ出で、屏風の内。

大辰「テサテ、聞いたより年若で、むつちりとしてそしてまた、この手の尋常なことはいの。いつから勤めて

年はいくつぞ。誰が逢坂の山とは付けた」

と、慕ひ寄る程

身を縮め、

写絵「問ふも憂し、問はぬも辛し武蔵鎧。かゝる折にや人は死すらん。思へば命はつれないもの」

と、託ち涙の有様を。

客はそつと差し覗き、

大辰「何やら可笑しいことを言ふて泣く人だ。問ひたいことがあらば、きりく言ふて早く寝たがよい。身共は涙を買ひには来ぬ」

と、不興も時の縁の端と、写絵は涙を押さえ、

写絵「世の浮き沈みは七度と、言へどもわし程幼いよ

り、苦勞辛苦の身はあるまじ」

大辰「ア、これくく、身の上話なら無用になさ

れ。この方、気晴らしに参つた者」

写絵「サア、話ももしや尋ぬる人を御存じあらば」

と問はず語り、

写絵「元自らは大内生まれ。父は北面、母は官女。互ひに若木の花の露、凝り固まりし種を残し、父上様には御発心、母様には三つの年死に別れ。二人の親のお顔も覚え、明け暮れ恋しい床しいと、思ひ暮らす心

の内、推量してたべ田舎人」

と、取り付き嘆けば、

大辰「ア、コレ滅相な。着る物へ涙がかゝると剥げるはいの。そんな話は西の海へさらり。こつかこの鳴かぬ内、ちやつと寝ようぢやあるまいか」

と身悶えすれば、

写絵「それよりな。私は家老の手塩にて、人と成りは成

つたれども、貧苦に迫り、子のある妻を売るを見兼ね

て我れと我が、身を河竹に沈みし辛さ。恥頭はして語

るのも、父上尋ぬる種にもと、知らぬ昔の興物語

り。哀れと思ふて下さんせ」

と、零す涙を

「こちらでは、客はましくし胸算用、

大辰「あの涙が、一雫が六分づゝ、高いものゝ。こり

やもう払ひしてお暇申さう。酒が三銚子、肴が梅

干と水辛、吸物共に三匁三分、五厘と払ふて帰ら

う」

と、立つを

引き止め、

写絵「これ申し、人は情けの下で立つ。つれないお方」と、引き止むれば。

大辰「つれないとはそ様のこと、因果経を説く様に、

エ、なんぢやの。親の行方を尋ぬるなら、その家老と

やら蛙とやらに、尋ねさしたがよいはいの」

写絵「サイナア」

大辰「またかいの」

写絵「悲しいはその家老の身の上。目界は見えず、敵

のために敢えない最期」

大辰「ア、なむあみだぶく、南無阿弥陀仏」

写絵「オ、よう唱へて下んした。涙の種を見せやんし

よ」

と、手箱の内より取り出だす白銀細工の袖香炉、掛地

一幅、

写絵「これ見さんせ。この猫の香炉は父上のお手に触れたといふて、家来がわしへの置き土産。またこの掛地はとゞ様の姿絵、母様の形見。存りし昔は佐藤兵衛

則清様といふて、文武の達人であつたといふ」

大辰「ハテ、それは結構なことの」

写絵「すなはち今日が、父上の御出家なされた月なり日なり。お前も逢ふてくださんせ」

と、屏風を飯の床柱、姿絵掛けて香炉を直し。

写絵「この焚く香が蘭奢待、反魂香でもあるならば、

お詞交はすこともある。何を言ふても絵空事。懐かしの父上様、恋しき昔のお姿や。絵に魂があるならば、娘と言ふて給はれ」

と、屏風に取り付きしがみ付き、

写絵「わしや、わしや今の身は永沈へ落ちたはいの」

と、どうど伏し、前後不覚に泣き沈む。

客はうろ／＼きよろ／＼と、立つたり居たり揚げ句には、ほつと草臥れ、ぐにやと座り、

大辰「コリヤマ、なんたる目に逢ふことだ。たゞし夢か

しらぬまで。また掛地の若戎を見る様な和郎も和郎だ。役目の鯛は釣らいで、仏を釣る坊主になるといふことがあるものか。よい／＼、身共が尋ねて逢はせ

てやらう。その代はりに、ノウ、コレ／＼。南無

三宝、泣き寝入りに寝入つたそなた。どうでも今夜はお伽番ぢや。ア、儘よ、盗人に追ひぢやが、物着て寝られ」

と、布団打ち着せ、

大辰「お庭なりとも踏ましよう」

と、ころりと転けて。

大辰「こんな時、得て流行風邪引くもの」

と、足で屏風を引き廻し、暫しは

ウクシ夢をや結ぶらん。

頃は弥生の春風に、誘はれ出づる閨の内、さつと屏風を吹き退くれば、

田舎大辰、初めの姿引き替えて墨の衣に玉襷、背虫と

見えしは風呂敷包み、西行法師の本体を念誦のために頭はして、すつくと立つておはせしが。

西行「我れ、その昔難波津の梅の香りに引かされて、この所にて日を暮らし、一夜の宿と乞ひしかど、主の心なかりし故、『世の中を厭ふまでこそ難からめ、仮

の宿りを惜しむ君かな』と詠みしも丁度十七年。娘も今年十七の、生まれた月生まれた日に、思はず／＼へ迷ひ来て、逢ふ嬉しさも余所に見る、心の内の悲しさを推量せよ」

と立ち寄つて、写絵が寝姿をつくづくと打ち眺め、恩愛父子の思ひの涙、留め兼ねておはせしが。

西行「尽きぬ縁として不思議にも、巡り逢ひは逢ひなが

ら、親とも子とも言はれぬは、仏へ誓ひの棄恩入無為。思ひ立つたる大願破れんことの悔しさに、放下て

聞いても心では、火焰の涙に噎びしぞよ。不憫やな、

さほどにまで、父を焦がるゝ志、嬉しいとも悲しいとも、逢ふて言はれずせてマア、夢になりとも見よか

しと、枕に涙の添乳ぞや。我れ、是非なくも頼朝に頼まれ、義仲の悪逆を諫めんために都へ帰り窺ひ聞け

ば、逢坂山といふ傾城に性根を奪はれ給ふとの風聞

こやつ殿の姐己、天下のために破戒して追ひ退けん

と思ひの外、合点のいかぬ年格好、娘と知つても我れ

と我が逢坂山といふが氣遣ひ。もし逢坂に極まると義

涙、

と、寄つては泣き、退いては泣き、寝顔へ掛かる血の

堪へ兼ねて写絵は、わつとばかりに泣き出だす、
『夢の覚めたが別れぞ』と、立ち退き給ふ
衣に縫り、

写絵「申し御出家様、親とも子とも申すまい、赤の他人
と思し召し、たつた一言聞いてたべ。絵姿と見比べ
て、もしやと思ひ空寝入り、それぞと聞いて飛び起き
るをぢつと堪へる辛抱は、お前に大願破らしまするが
勿体なき。ことに逢坂山ならば手に掛けて殺すとあ
る。初めに偽り後に起き、わしや逢坂でないといふ未
練な言訳なりもせず。たとへ言訳立つたとて、親子の
名乗りもなることか。憂き勤めをせうよりはいつそ死
なう、殺して貰をと死ぬる覚悟も有り様は、浮世に飽
いてのことなるぞや。今さら言ふではなけれども、逢
坂山は姉女郎、私は写絵、今日出初め。その証拠はコ
レ奥で、合点のいかぬ文拾ひ、わしや泣く内に読んで
見た。これ見て疑ひ晴らして」

と、差し出す文は最前の逢坂山が読んだ一通、
西行取つて見るよりびつくり、

『運の極め』と笑壺に入り、娘が知らせを待つ間程な
く。

板縁伝ひに来る足音、

『すは人こそ』と身を縮め、忍びて様子を窺ひ居る。

入り来たるは西行法師、奈落までも離さぬ風呂敷、しつ
かと近江の太布衣、きりゝと巻き上げ甲斐々々しく、

西行「ヤアく義仲、その身將軍の職を戴き、西国追討
の院宣を受けながら、売女に迷ひ奢りを究め、大臣
部下への狼藉我儘、その罪を糺せとある頼朝の頼みに
よつて、佐藤兵衛則清入道西行法師、実否を糺しに
向かふたり。お出やれやつ」

と呼ばつたり、

寝耳へ入つたか荒氣の大将

義仲「ヤア、存外なる捨て坊主、息の根止めよ石黒」

と、名指しに

幸ひ隠れし出汐、一味を引き連れどつと駆け出で、『縛
れ、括れ』と一時に、折り重なるを

事ともせず、

西行「さては、石黒左衛門めは平家の侍、瀬尾の太郎よ
な。鼓判官と心を合はせ、おのれが娘を餌に飼ひ、
事を図るか。たゞしまた、義仲共に平家へ一味か、頼
朝の頼みはこゝ。実否を糺さん、寝間はいづくぞ」
写絵「ア、アレ、あの向かふな富士の間の大座敷、今宵
は分けて石黒が饗応との仲居が噂」

西行「それなほ氣遣ひ、猶予ならず。親子の名乗りは
私ごと。天下のために火に入るとも水に入るとも、
時こそ移れ、急げ、来たれ」

と性急に、昔の残る則清入道、

娘も後に引添ふて、奥の間へ

三重 行く空も。

早や丑満の、寝入り端、

『時分は良し』と石黒左衛門、寝間を窺ひ、抜き足差し
足息を詰め、忍び寄つて富士の絵の、襖をそつと押し
開ければ、

義仲公は余念なく、屏風に上着帯羽織、取り乱したる有
様は、

西行「オ、しほらしき蝗共、武芸は久しく捨てたれど
も、頼朝に逢ひたる時翔け鳥を射て手並みを見ず。今
また木曾が枕元、根太響かしてくれんぞ」

と、捕つたと掛かるを

右に受け、左へ返して頭顛倒、弓ん手へ掛かればこなた
へころり、両手返しに両腰投げ、向かふの霞死活の術、
さしもの大勢縁先へ打ち付けられて、皆散り散り、

石黒「いらざる坊主の腕立て憎さも憎し、石黒が刀の切
れ味試みよ」

と走り掛かつて振り上ぐる、
当てたか蹴たか石黒左衛門、『うん』とのつけに反り返
る、

西行見捨て、

西行「ヤア義仲、我が手並みに恐れて出ぬか。放埒尾籠
の閨の内、恥頭はして見参」

と、つゝと寄つて立てし屏風を引たくれば、

内に大将逢坂が懐剣持ちし腕捻ち上げ、烏帽子装束、華
やかに出で立ち給へば、

さしもの西行『ハツ』と飛び退き、

西行「こはいかに、こはいかに」

と、驚き顔を

はつたと睨め付け、

義仲「おのれ、文武の徳ありと世上の噂を鼻に掛け、我が意を振る舞ふ事可笑しや。いで義仲が見参に奉ると、女が持つたる懐剣もぎ取り突立ち給へば、矢先で息の根止めん。受けて閻魔へ訴へよ」

と、女が持つたる懐剣もぎ取り突立ち給へば、
びくともせず、胸押しくつろげつゝと出で、

西行「西行が胸板には釈尊一代の経々に、仁義礼智の五常を納め、固め置いたる胸の内、我慢邪念の剣が立たば、立てゝみられよ。サコゝを、所望々々」

と向かふに立ち、的になつてぞ待ち給ふ。

悶絶したる石黒左衛門、性根付いてむつくと起き、

石黒「ヤア大将の剣に及ばず、坊主が首はこの剣」

と、飛んで掛かると手裏剣の、はつしと来るが途端の拍子、敢えなや石黒左衛門は、『うん』とばかりに息絶えたり。

護「ノウ悲しや」

と、逢坂山、走り寄つて

護「コレ父上、この刃物で大将の命を取れとの言ひ付けを、自害する気で受け合ふて、死ぬるところもぎ取られ、今またお前の命取る、剣も因果も一時に巡つたはいの」

と取り付いて、泣くより外のことぞなき。

西行不思議の顔色にて、

西行「ヤアラ心得ず、愚僧を目当ての切先、出頭第一の

石黒へ打ち付け給ふ御所存はな」

西行「ホ、ウ、彼は平家の侍、本名は瀬尾の太郎光興」

西行「ム、それ知つてまた、四天王の旧臣を遠ざけ、

彼一人を御寵愛はなぜなされし」

西行「イ、ヤ、燕雀鴻鵠の心を知らず。四天王の諫め

は理の当然。遠きを慮つて瀬尾が勧めに従ひ、

放埒懦弱に身を持つても内通さして敵の油断、用心の

網を張らすまいため」

西行「ムウ、尤も、面白し。さりながら、大臣以下の館

へ踏み、公卿殿上人への狼藉。科なき者を捕らへなぜ拷問にはお掛けなされた」

義仲「ホ、オ、その言訳は譬を取つて申さん」

と、しづく立つて富士の絵の書いたる襖、両方を細目に開き、

義仲「あれ見られよ西行、富士は三国の名山、八葉の

峰とはいへど、絵に書く時は三つの峰、これ日本の神

宝、三種の神器に表せし山。両方を開き、三つに分

けたる心は、一方は内侍所の神鏡。この御鏡は都

に在します法皇の御手にあり。また一方の峰は草薙の

宝剣。この御剣は須磨に在します安徳天皇の所持し給

ふ。まづこの二色は有り所明白。たゞ情けなきは真ん

中の峰に喩へたる神璽の御箱。鳥羽院崩御の節より

紛失して有り所知れず。平人の手にあらう様なし。心

許なきは公卿天上人と思ひ、館へ踏み狼藉するも、

心は家捜し。三国一の名山もアレあの如く破れたる時

は端山築山、御宝とてもその如く一つ欠けても石

瓦、日の本の宝といはれず。何卒神璽を尋ね出さん

と忠義に計る狼藉も、かへつて不忠の疑ひ受け、平家

に勝る悪縁と、世上に言はるゝ無念さを推量あれ」

と両眼に、涙を浮かめ宣ふにぞ、

西行法師も理と思ひながら、底心を探しみんと膝立て

直し、

西行「絵書きし富士を三種の神器に取つての言訳、尤も

尤も。さあらばまたこの三つの峰を人間にとつては

三徳兼ねし名将。いづれの人を名指すべき。御所存い

かに」

とありければ、

西行「ホオ、それこそは、まづ真ん中が右大将頼朝、一

方の高根は蒲の冠者範頼。こなたの激しき峰こそは」

西行「義仲公か」

西行「イ、ヤ、源九郎義経」

西行「しからば貴公の御身をば、いづれの山に喩へて言

はん」

西行「オ、この義仲は富士の恵みに生ひ茂る、山に取つ

ては足高山。前にあつては敵を防ぎ、後ろを守つて戦

功なすとも、終には牧の狩場となり、野飼ひの駒に鞭打ちて都を開くは今の内。とあつてさらく悔しいとも無念なとも思ふにこそ、我が心底はこの通り」

と、ずつと立つて開きし襖、両方一度にぱつと立つ。

西行「これく見給へまつこの如く、頼朝、義経、蒲の冠者、兄弟三人心を合はせ、天下を固むるものならば、唐天竺が一つになり、平家に加勢するとても、いつかないかな思ひも寄らず、源氏の末は鶴亀のなほ行く末も目出たからん。思ひ廻せば廻す程、頼朝は果報人、いかなれば義仲は命を敵の矢先に当て、辛勞辛苦を凌ぎ来て、悪人よ愚将よと言はれながらも天下のためと、耳を閉ぢ口を閉ぢ、堪ゆる辛さは湖浅し、思へば富士もまだ低し。終には都を追ひ払はれ、屍を泥に埋まれん。チエ、浅ましさを」

と良將の、仰せは後に近江路や、粟津が原で流れ矢に、命を果たし給ひしを、思ひ合はすも哀れなり。

西行悲嘆の涙に暮れ、

西行「その御嘆きはさることなれども、為す事する事天

下のため、まさかの時は愚僧がでて、申し開き参らせん。またの参会重ねて」

と、座を立ち給へば、

善「ヤレ心強や西行、かくまで心底明かせども、貴僧は疑ひ晴れざるか」

西「コハ、興がる仰せ。疑ひ晴れたればこそこの儘で罷り帰る」

善「イ、ヤ、蛇は一寸にしてその氣を得る。最前、石黒が悶絶は死活と見えて死活にあらず。眼前の神罰」

西「その神罰は何故ぞ」

善「貴僧が背負ひし風呂敷包みは、正しく日本の神宝神璽の御箱と見た目は違はじ。疑ひ晴れたら急いで渡しくれられよ」

と、退つて拝をなし給ふ、頓智の程ぞ類ひなき。

西「ホ、才天晴れの推量。鳥羽の法皇崩御の砌、

某を密かに召され。『未前を察するに乱世近きあり。汝にこの神璽の御箱を預くる。三徳兼ねし名將を見立て相渡せよ』との遺勅。程なく源平の戦ひ始ま

る。さてはと思ひ、歌枕と世上へ言ひ立て遁世して

諸国を巡り、頼朝に逢ふたれども、兄弟の愛薄き人

相、この人へも渡されず。貴公はまた愛に溺れ、身の

上の曇り見えず。さるによつてこの御箱渡すこと叶はず」

と、聞くより聴き大将ひらりと庭に飛んで下り、泣き沈んだる逢坂を取つて引き寄せ、

善「不憫なれども平家の余類、愛に溺れぬ言訳」

と、御佩刀を抜き放し振り上げ給へば、

西行「ア、これく、その女を殺さしては西行が手を下るすも同然。殺生戒を破らすか。真神璽が受け取りたくば、その女を助けて殺せ」

善「ホ、実に尤も。助けて殺すは、まつかうか」

と、逢坂山が黒髪を根よりふつと押し切り給へば、

西行「ホ、才天晴れ天晴れ。助ける仁心、殺す智謀。勇は元よりその身にあり。三徳兼ねし名將へ御宝渡さん、法皇へ差し上げられよ」

と背負ひたる風呂敷包みの内よりも、神璽の御箱を取り

出だす、首が落ちても西行の風呂敷包み離さぬは、実に

理と見えにける。

善「有難や忝や、我が大願成就」

と悦びの中

嘆きの中、逢坂山は泣き萎れ、

と、託つても道理

道心の、西行法師はこれよりも風呂敷包みの苦を逃れ、

西「お暇申す」

善「ヤレ暫く」

と留め給ひ、

善「聞けば頼朝対面の砌、白銀の猫を餞別ありしと

伝へ聞く。義仲も有り合はせし猫を進上申さん」

と、一間の内より写絵呼び出し、

善「傾城は猫といふ。コレこれも娘ではない、猫なるぞ」

と、渡し給へば

西行 「過分々々、頼朝に貰ひし猫も門前の童に遣る。

今また貰ひしこの猫も、尼道心の道連れに遣る」

と言へども心は頼み、

悲しさ隠し写絵が涙と共に渡す杖、

こなたは恩愛、あなたは妹背、着るも解くも夢の世や、

覚めては真如平等の台に至らん、

さらば、さらば

さらば、さらばの暇乞ひ、

慕ひ寄る身を大将の、隔つる雲の絶え間なく、

頭は見えぬ襖の蔭、思ひの煙立ち登る、富士の高嶺の

白妙も、漲る氷胸に満ち、走り降りてつくぼりと、打

ち眺めたる有様は、

富士見西行これなりと、末世の絵にも伝ふらん